原田信男著

『中世村落の景観と生活—関東平野東部を中心として—』

思文閣　1999年12月

A５版　601ページ　本体10,800円

原田信男氏は，食生活と景観研究を関心の軸とされてきた中世・近世史家である[1]。評者は院生の頃から，原田氏の歴史地理学的示唆に富む論考を拝読する度に，歴史学と歴史地理学の関係を考えさせられた。歴史地理学的な問題意識が歴史地理学者だけの専有物ではないことは誰もが承知していることであるが，現実には歴史学と歴史地理学との間には，ディシプリンごとに完結しようとする求心力が作り出した不透明な幕が垂れ下がっているように思われる。その幕を原田氏のようにくぐりぬけることができる研究者は，実に少ない。しかし日本史の分野において，歴史地理学に近い問題意識を継承する潮流が途絶えていないことは心強く，また励みともなる。本書の著者原田氏も，村落史の木村礎・高島緑雄の両氏で著名な明治大学に履歴をもつ。また，本書は歴史地理学会にご寄贈いただいており，著者ご自身も，本書が歴史地理学者にどのように読まれるか，興味をお持ちのことと推察申し上げる。

本書は，1982年以降の諸論考に基づいているが，単なる論文集ではなく，むしろそれを土台として書き改められた学位論文である。景観復原を軸とする第１部と，村落生活を軸とする第２部が本書の大枠であり，この枠を構成すべく，総説的叙述・史料分析ともに，新たに書き下ろされた内容がかなり含まれている。以下では，本書の構成に従って内容を紹介していきたい。

まず序章では，関東平野の地形と利根川流路の変遷が概説された後，今日の水田が広がる景観とはかなり異なっていた中世関東平野の景観像が提示される。それは，水に溢れた平坦な荒野と繁茂する低い草木からなる自然環境であり，その茫漠とした空間の所々に耕地と集落が散在する景観である。この想定は，第１部全体の基礎となっている。

第１部「中世の村落景観」は，本書の景観復原のアプローチを示す第１章「村落景観の研究史と方法」から始まる。そのなかで本書の意義に直接関わるのが，文献史料に乏しい関東平野の景観復原にどう取り組むのかという問題である。中世関東の村落景観の復原研究は数も少なく，しかも少数の特定の事例のみから理論化が図られる傾向があったことを，著者は指摘する。その点を克服すべく提示されたアプローチは，偶然中世史料が残存した場所でのみ中世村落を論じるのでなく，広範囲な地域を最初から視野に入れ，さまざまな村落の立地条件を考慮しつつ，鳥瞰的に地域の全体像を追求する方法である。そのためには，明治期の地形図，近世村絵図，近世初期検地帳，その他の近世地方文書と官撰地誌，さらに考古学的調査，小地名までを総合的に利用し，近世期から中世へと遡及する技法を採用する。これは，木村礎・高島緑雄[2]が試みたアプローチを継承したものと言えよう。

この方法で復原された景観は，一年刻みの年代で比定できるものではなく，かなり幅のあるタイムスパンにまたがった景観を復原することになるが，それを承知の上で採用された遡及的アプローチである。正確な年代に裏打ちされた実証を至上とする立場からすれば，勇み足に過ぎるとの感想も出されるであろう。しかし，一次史料が不足する状況を前にしてただ沈黙するのでなく，史料の枠を広げると同時に，対象とする事例を一村落でなく関東平野各地に求めて，景観形成の諸類型を浮かびあがらせた本書の研究戦略は，十分評価されるべきだと思う。なお，近世期から遡及するに際して，集落の移転が問題となるが，著者は考古学の成果を参考にしつつ，近世村落の祖型は，古くからの中世村落を除き，15～16世紀に形成された場合が多かったと推定している。

続く第２章「村落景観の環境」は，太田荘・下河辺荘を中心に中世村落を取り巻く社会環境と自然環境を概観したものであるが，具体的には，まず郡・郷・荘の関係が整理され，近世地誌が記録した郷・荘の範囲が，かなり正確であったことが分析される。次いで地形と開発に関わる現存地名，空閑（クーガ・コガなど）や浮島，塙などが紹介され，さらに17世紀の『武蔵田園簿』が示す田畑面積が集計された上で，序章で述べられた景観像の想定が再び提示される。

第３章「村落景観の諸類型」では，地形条件と用排水によって，村落の７類型が提示される。順に要約すれば，Ⅰ山麓湧水地帯：①山麓型（水田率が高く，下田率も低い。古くから主要な武士団によって開発が進んだ。関東平野のうちで最も恵まれた村落景観）。Ⅱ洪積台地湧水地帯：②深い谷田型（下総台地に典型的にみられる。水田率は

高いが，排水条件が悪いために，下田率も高い）・③浅い谷田型（関東平野の洪積台地部に最も広汎に存在した類型。台地の比高が7～8m以下の低い台地に成立。台地上の畠地と谷田に依拠する。谷奥に湧水池を設置する技術が背景にあると想定される）。Ⅲ洪積台地無湧水地帯：④低台地型（水田率がかなり低く，台地上の畠地に強く依拠する）。Ⅳ沖積低地湧水地帯：⑤乾田低地型（用排水路の設置により比較的安定的な水田が確保され，二毛作も可能であった）。Ⅴ沖積低地悪水型：⑥湿田低地型（後背湿地に位置し，集落は自然堤防上に立地。部分的に用排水路が設置されたが，耕地の多くは摘田・堀上田・島畠が混在する状況），⑦人工堤防型（鎌倉幕府や領主の主導により，自然堤防が人工的に強化された結果，湿田低地型の村落景観が用水路の完備した水田中心の景観へと変化したもの）である。それぞれの類型には，近世初期検地帳を中心とした詳細な事例分析と復原図が例示されている。本章は，1章で述べられたように，特定の事例を一般化するのでなく，関東平野全体の村落景観を意識しつつ，その類型化を試みたもので，第1部の要となっている。

第4章「村落景観の諸要素」では，耕地の生産力，村落の区画溝，山野，道，墓地，城館・居館に関して，それぞれ個別事例では論じきれなかった問題が，全体的な視点から，また先行する諸説の評価を通じて，再検討されている。その内容は多岐にわたるため要約を避けるが，島畠や「堀の内[3]」に関しては論争的な議論にも踏み込んでおり，注目される。

第1部の最後となる第5章「村落景観と領主権力」は，まず第3章で提示した村落景観の類型と領主権力との間に相関性があることを議論している。すなわち，地形を大きくⅠ洪積台地（山麓も含む）・Ⅱ沖積平野に分けた場合，相対的に早くから武士団が開発を進めたのは，それぞれで最も好条件の地である①山麓型と⑤乾田低地型であり，①では新田・淵名・足利・真壁氏が，⑤では小山氏が，その代表例である。他の類型，Ⅰ洪積台地であれば②深い谷田型・③浅い谷田型，Ⅱ沖積平野であれば④低台地型・⑥湿田低地型・⑦人工堤防型は，有力豪族から分出した家々が次第に進出した類型だとされる。むろん著者も断っているように，こうした類型化には例外的な事例が伴い，実際には複雑な様相を呈していたと考えなくてはならないが，一定の傾向としては認められるといって良い。その上で本章は，戦国期～近世初期の景観の変化を概観して締めくくられている。

さて，第2部「中世の村落生活」は，第1部と同様に方法論的議論から始まる。第6章「村落生活の研究史と方法」は，景観研究と同様に文献史料の制限が大きい生活史研究の意義と方法論を論じたものであり，主に歴史学全体のなかでの位置，社会史・民俗学・考古学との関係，文献史料の活用法について著者の見解が述べられている。ただし，具体的な問題や論争的なテーマについてはあまり言及がなく，「生活史研究はまだ緒に着いたばかりであり，課題の方が大きく方法的にも未確立で暗中模索的な状況にある」との著者の言葉が，このテーマの現状を端的に言いきっている。

続く第7章「村落生活と自然環境」と第8章「村落生活と社会環境」は，中世関東の村落生活をとりまく環境を総説的に論じたもので，先行研究の整理を踏まえた上で，さまざまの断片的な文献史料が組み合わせて活用される。自然環境としては，主に生業（第1部で扱われた農業を除く）と災害の状況が取り上げられ，台地と河川・沼に恵まれた関東平野では，村落の立地条件による比重の違いはあれ，かなりの割合で狩猟（鳥猟を含む）と淡水漁業が行われていたと述べられる。災害については，11頁にわたる略年表が提示された上で，「小氷期」よりも風水害・旱害に中世農民が苦しめられていたと述べられているのが目をひく。社会環境としては，領主支配，郡・荘・郷・村，および「自力救済」の在り方が取り上げられている。いずれも中世史では重要なテーマであるが，できるだけ関東の文献史料を渉猟する形で改めて概説されている。なお付節として「関東平野の水運と陸運」が付せられている。

以上の2章による環境の概観を経て，第2部の中心となる二つの章が続く。第9章「村落生活の諸相」は衣食住を扱うもので，さまざまな文献史料が吟味される総説的な内容をもつ。まず衣類に関しては，ルイス・フロイスの観察が効果的に紹介されつつ，日常着の在り方，身分標識としての衣服，衣料の材質とその変化について，検討が行われる。次いで食生活については，すでに著者には2冊の専著があり，そこで強調された魚肉食の一般性と領主層の米への志向が本書でも再度強調されるとともに，中世前期と後期の違い，食事回数，魚肉食，飢饉，米への志向が吟味されている。住居に関しては，若干の考古学データ・絵画史料

が紹介され，礎石建て・掘立柱の違いに代表される階層に応じた住居の差異に主として叙述の力点が置かれている。残念ながら，著者も触れているように，衣食住のいずれをとっても，東国あるいは関東という地域に限定された文献史料が少なく，著者は西日本のデータを援用して概説的に述べながら，部分的に関東の状況に言及する，というスタイルを取っている。

そのようなもどかしさに対して，第10章「村落生活と宗教」は関東平野の事例を取り扱う。まず神社の分布図から「神々の地域性」が確認された上で，近世初頭の宮座の在り方と草切り伝承の関係が検討される。次いで中世常総における新仏教浄土真宗と旧仏教真言律宗の展開と立地条件が吟味される。それは，真宗が平野部沖積低地周辺に，律宗が筑波山に展開し，それぞれ正反対の肉食観を説いた背景として，狩猟・漁撈が果たした役割の大きい沖積低地を拠点とした真宗が，魚肉食を積極的に認めようとしていた状況を指摘したものである。著者はこの対比を「一つの地域の中でも，その自然条件と歴史性とによって，異なる宗教生活が同時代的に併存していた」と小括している。

終章「中世から近世へ」は，村落の景観と生活それぞれについて，近世への移行を展望するもので，景観については，統一政権の土木工事と新田村落，ならびに太閤検地に触れ，中世から近世への変化を決して過小に評価すべきではないとする。生活については，近世の衣食住規制，肉食の禁忌と米重視に言及した上で，農民住居に関しては近世初頭に大きな変化はなく，17～19世紀にかけて新たな住居スタイルが実現したとする。

以上でおおむね本書の内容を紹介した。著者は自らの方法を特に「歴史地理学的」だと形容されてはいないが，本書の問題意識が優れて歴史地理学的な視角を含んでいることは，以上の紹介から明白であろう。とりわけ第1部を前にした「はじめに—問題の所在」には，短文ながら著者の時空観が吐露されている。それは，歴史を通じて改変されてきた自然的・人文的環境から人は自由ではなく，前代から与えられた重層的な条件のなかで生きてきたという認識である。筆者はまた，「歴史とは時間と空間とを人間が織りなす文様」だと述べ，これまでの歴史学が「余りに時間にこだわりすぎて，空間の持つ具体性を欠落させてきた」とし，「空間の復権」を強く主張している。この立場は，多くの歴史地理学者にとって同意しやすい信条であると言ってよい。

この空間へのこだわりは，やはり景観復原を問題とした第1部に強く発揮されているが，全体を通じて本書における空間の意義は，おおよそ3点に要約できると評者は考える。一つは，個別の復原事例から性急に理論の一般化を急ぐ傾向のあった先行研究に対して，単に事例を蓄積し続ける方向を提示するのでなく，関東平野全体を視野に入れる立場を取ったことである。個々の事例研究としてならば，第1章が提示する近世史料等を活用した景観復原の技法を試みた歴史地理学の研究は，決して少なくない。また，著者も整理しているように，中世の景観復原研究は，近年次第に各地の事例が多く報告されるようになってきた。にも拘わらず，断片的な史料分析を縦横に駆使して，一つの広域な地域全体に目配りしえた研究例は，それほど数は多くない。

第二は，関東平野全体を視野に入れると同時に，関東平野内部の地形条件の差異を強く意識し，その地域差もしくは地域性を類型化した視点である。これは，自然条件と土地利用の差異を類型化した第3章と，それを踏まえて武士団と仏教の展開に関連づけた第5・10章に，最もよく表れている。

第三は，本書が対象を関東平野に定めたことで，東国と西国の差異が，本書の潜在的な主題となったことである。実のところ，関東を対象として選択した理由について，著者は何ら明確には述べていないし，東国と西国の差異を正面から論じた章節は含まれていないので，このことを強調されるのは著者の本意ではないだろう。ただ，これまで歴史地理学者が対象としてきた中世村落と荘園の多くは西日本に位置しており，結果的に今日の歴史地理学の中世村落像が，意識するにせよ，しないにせよ，西日本中心のものとなっていることは否定できない。東国と西国という分け方そのものに固執するわけではないが，中世の当時から認識されていたこの地域差に対して，歴史地理学は今なお十分な答えを出せていないのではないだろうか。

本書の書評もまた，評者のような若手ではなく，中世東国に造詣の深い方によって，より細部の論証にまで踏み込んだ評価がなされるのが理想であろう。その点は著者にお詫び申し上げるほかないが，最近では歴史地理学においても中世東国の研究例が増えてきたように思う。著者は第6章のなかで，東国と西国の地域差が近年強調されている

ことに触れ，「それぞれの地域の特性を把握し，その上で生活の場としての中世村落を取り巻く環境条件の在り方を，一つずつ明らかにしていくのが理想である」と述べている。その作業が所属分野を問わず進展することを今後に期待したい。

1）　これまでの著者の単著を挙げる。原田信男（1989）：『江戸の料理史』，中央公論社，259頁。同（1993）：『歴史のなかの米と肉—食事・天皇・差別—』，平凡社，317頁。同（1995）：『木の実とハンバーガー——日本食生活史の試み—』，日本放送出版協会，275頁。

2）　木村礎・高島緑雄編（1969）：『耕地と集落の歴史—香取社領村落の中世と近世—』，文雅堂銀行研究社，458頁。木村礎編（1988）：『村落景観の史的研究』，八木書店，599頁。高島緑雄（1997）：『関東中世水田の研究—絵図と地図にみる村落の歴史と景観—』，日本経済評論社，188頁。

3）　「堀の内」を用水のみから解釈しない点で，伊藤寿和（1998）：「中世東国の「堀の内」群に関する歴史地理学的研究—北関東を事例として—」，歴史地理学，40－1，63～80頁，に近い立場を取る。

（米家泰作）